



Title	卷末言
Author(s)	小川, 巖
Citation	新ひぐま通信 別冊 : 第7回国際クマ会議報告書, 101
Issue Date	1986-08-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91664
Type	other
File Information	kanmatsugen.pdf



[Instructions for use](#)

巻 末 言

小 川 巖

ヒグマ研の現役、OB 5人が打ち揃って国際クマ会議に出席すると聞いた時は、心底わがことのように嬉しかった。16年前ヒグマ研を旗あげさせて以来の夢が実現できたのだから。単に遠く海外まで足を伸ばせるまでになったということにとどまらず、長年に及ぶ研究の蓄積を広く社会に対してアピールするまでに成長したことも重要である。

それだけではない。北海道に分布するのと同じヒグマがアメリカやカナダではどんな生活をして、どう扱われているかという情報は入ってきても、逆に北海道にすむヒグマのおかれている状況は、海外ではほとんど知られていなかった。今回、国際クマ会議の場で発表された北海道産ヒグマに関する数編の報告は、数こそ少ないながらも各国から待望された Made in Japan の“輸出品”にたとえることができるであろう。

会議出席のみならず、終了後に各人が手分けして駆け巡った北米各地の現地クマ事情レポートは、密度の濃い臨場感あふれた報告となっている。いわば品質のよい“輸入品”にたとえられるこれらのノウハウをいかに生かしていくかが、われわれに課せられたこれからのテーマになるに違いない。この報告書が、帰国後短期間のうちにまとめられたのは、このような気持ちの表れに他ならない。

最後の最後になってしまったが、会議出席に合わせる形であわただしく発足させた「ヒグマ研究交流基金」には、急なお願いにもかかわらず、ヒグマ研のOBを中心に一般の方も含め全国各地から基金が続々と寄せられ、渡航費用の不足を補うに足りる50万円に達したことに対してこの場をお借りしてお礼させていただきたい。本報告書はそういった方々への感謝の気持ちをこめ、まだ感激の薄れぬうちに編集しようと努めたこともこの際明らかにしておきたい。

基金は渡航費用の助成をもって使命を終えるものでないのはもちろんだ。体制を整備させた上で改めて、交流基金の名の下に新たな事業を行っていきたいものと考えている。交流という以上、日本からの派遣に片寄らず、海外の研究者等と呼べるだけの力量をもっていきたいものと願っている。この報告書の刊行は、そういう意味でひとつの小さな事業の総決算であると同時に、世界のクマを見ずえたひとつの大きな事業開始の足がかりでもあると考えている。今後も一層のご支援を重ねてお願いしてしめくくりとしたい。